

宮城から、伝えたいこと。

つなぐれ、どこまでも

Baton

バトン

VOL.

15

FROM MIYAGI

特集

災害を学ぶ ということ

きて・みて

【ボランティア解説員】みやぎ東日本大震災津波伝承館(石巻市)

【防災の取組】福住町町内会防災訓練(仙台市) わくわく防災フェスティバル(多賀城市)



テーマ:

災害と学び

仙台市立西多賀中学校の避難所運営訓練。地域防災リーダーの指導のもと中学生が自助・共助を学ぶ。

あしたのクリエイティブ アイリスオーヤマ株式会社の「ペット用防災セット」

バトンとは

世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

災害を

自然災害の被災地を訪れる人の姿は、時間の経過とともに変化します。

災害ボランティア、復興事業者、

歴史・文化に積極的に触れながら観光する旅行者、

あるいは被災地視察や防災・減災を学ぶ一行。

ここに、いま多様化しているのが防災・減災について学ぶ教育旅行です。誰と会い、何を見て、どんな風景の中を歩くのか。

ここでは東北の被災地を訪れた福岡大学の夏期セミナーを例に、大学の目的意識と学生が抱く未来への思いを紹介します。

学ぶ

東日本大震災の被災地では、その経験と教訓を防災・減災の知恵に変え、次世代に伝える活動を展開しています。一方、被災地を訪れる教育旅行や防災・減災研修は、全国の学校・団体にとってもはや欠かせない学びの場となっています。

意図をもって残された旧校舎・庁舎などの遺構、新設された伝承館での趣向を凝らした展示や映像。震災から年月を経たいま、多様な施設が各地に建てられています。年齢層や理解度に応じ、どこでどんな体験をするかという選択肢は広がっているのです。もちろん個々を単体で見学・体験するだけでも意義あることですが、さらに点と点をつなぎ、被災地を面とらえることによって新たな風景が立ち現れます。

福岡大学が2024年度に実施した「防災・減災」をテーマとした夏期セミナーは、5泊6日の現地研修プラス前後の座学。福島・宮城の多数の伝承施設や医療機関で実践をまじえた体験をし、被災した方々とも交流を深めました。豊富なノウハウを持つ旅行会社との包括連携によって実現した特徴ある取り組みです。背景には、災害時に地域の災害拠点となる私立大学として、災害に高い意識を持つ人材を養成するという高い目標があります。

参加学生は東日本大震災の爪痕について情報が希薄な地域に育った若者たち。その鮮烈な体験を通して社会への新たな視点を見出し、そこに自らの未来を重ねて歩き始めました。

と会い、ついでに



広大なキャンパスで2万人超の学生が学ぶ福岡大学(福岡市城南区)。左から、学生課の手嶋遼嗣さん、医学部看護学科3年の原田卓弥さん、法学部3年の加藤颯太さん、日本旅行の濱田里奈さん。



南三陸にて地域の方々の意見交換会。

当時の町民の状況を詳しく知る機会に。



「今回は学生が企画段階から関わる体制にしていきたい」と語る学生課の手嶋さん。



石巻赤十字病院でのDMAT研修。

総合大学として 地域防災を担う

福岡大学では2023年より全学部横断的な取り組みとして、「観光・街づくり」と「防災・減災」という2テーマを隔年交互に設けた夏期セミナーを実施しています。「防災・減災」をテーマとした2024年は、東日本大震災の経験に学び、九州での大災害発生に備えた実践的防災の知識・技術の修得を目標に、31人の学生が濃密なプログラムに取り組みました。

夏期セミナーと銘打ちながらも、多彩な講師を招いて6月から始まる事前学習（講義3回）と8月の宮城・福島両県での研修（5泊6日）、9月・10月の事後学習、そして12月の成果発表会と、半年間にわたる

プログラムです。震災への理解を深めてから現地を訪れた学生たちは、福島県の東日本大震災・原子力災害伝承館、宮城県の気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館、南三陸311メモリアルなどの伝承施設に足を運ぶほか、被災経験者の生の声や災害医療現場の体験に耳を傾け、その体験をいかに将来に生かすことができ

るか、時間をかけて学びます。被災地の視察研修や教育旅行が普及しているとはいえ、これほど体系的かつ多角的な取り組みは類を見ません。その背景を、夏期セミナーの運営を担当する福岡大学学生課の手嶋遼嗣さんが解説してくれました。

「学生課は2011年から東日本大震災災害ボランティア福岡大学派遣隊の活動をサポートしていました。学生が望むボランティア活動参加や震災関連施設訪問を調整し、飛行機やホテルの手配をするという役割です。ただ、震災発生から年月を経て、当然学生たちの意識も現地が求めるこ

とも変化します。学生はメディアで頻繁に取り上げられる場所を選びがちで、前年踏襲のマンネリ化も見られましたし、現地からは防災教育に重点を置いてほしいという声が聞かれました。そこで本学と連携協定を結んでいる「株式会社日本旅行」に、募集段階から成果発表会まで一貫したプログラムの作成業務を委託しました」。

福岡大学のある城南区は市総合ハザードマップで土砂災害や津波被害の危険性は指摘されていますが、災害発生時はキャンパスが被災者の受け入れ拠点となり、大学病院では災害医療派遣チームDMATを組織します。また、大学は区と共同で毎年避難所開設訓練も行っています。さらに範囲を広げてみれば、九州地方は頻繁に豪雨災害に見舞われています。

「総合大学として防災・減災のプロフェッショナルでありたい、学生たちにも大学の一員として避難所運営などの一翼を担ってもらいたい。そんな

福岡から宮城へ学びに。 「防災・減災」セミナー

な本学の災害に対する意識が、この夏期セミナーに投影されています」と手嶋さんは語ります。

災害医療にフォーカス

定員30人で募集を始める、それを上回る数の応募がありました。しかも、その半数を占めるのは医学部看護学科の学生たち。前年の「観光・街づくり」セミナーでは見られなかった傾向です。夏休み期間に実習が課せられているなか、災害時に求められる役割を能動的に考えて応募した面々を意識し、災害医療に関するプログラムも盛り込まれています。そんな企画の立ち上げから担当したのは、株式会社日本旅行福岡教育営業部

の濱田里奈さんです。

「2022年から大学の意図をくんで打ち合わせを進めました。弊社は高校の修学旅行や研修旅行をはじめ、さまざまな企画を手掛けていますが、この夏期セミナーは既成の枠にはまらない、九州ではこれまでにない取り組みです。ゼロベースから企画を組み立てました。私が訪れた経験があり学生たちにもぜひ足を運んでほしい場所、お話を聞いて被災時に被災者受け入れの最前線となった石巻赤十字病院でのDMATのトリアージSTART法の実践演習、南三陸町での避難所や仮設住宅の自治会長経験者などのデイスカッションや、元気仙沼消防指揮隊長の講話など、個人旅行ではなかなか体験できない要素を盛り込みました」。

「座学だけでは心の深い部分に届きにくい、せつかく足を運ぶのなら被災地のリアルを見てもらいたい、記憶のディテールに触れてもらいたい」そう意図して濱田さんは行程を組んだそうです。それは宮城・福島の住民でも得難いような充実の内容で、学生たちは一人ひとり各所で深い印象を胸に刻んだようです。成果発表会ではそれぞれのテーマに沿って、災害を自分ごととしてとらえるプレゼンテーションが目立ちました。

セミナー参加から 災害サークル立ち上げへ

稗山も特別に見学させてもらった。



「石巻市震災遺構大川小学校」を見学。



成果発表会まで見届けた濱田さんは、「学生の成長が実感できて感慨深い」と振り返る。

「南三陸311メモリアル」での解説。



館内を見学し南三陸の被害を知る。





松島の魅力も感じながら被災地を学ぶ。



「松島遊覧船語り部クルーズ」に参加。

のディスカッションを組み合わせたもの。加藤さんは、未だのまちづくりについてのディスカッションで南三陸町での体験を話題に出し、親子で参加できる防災ワークショップを提案しました。

「都市は人と人のつながりが希薄で孤立しやすいです。それだけに、地域に顔見知りがいればとちよっとしたつながりがあるだけで、災害時のコミュニケーション全体の安心感が大きく変わります。僕らの存在は小さいけれども、一つひとつ行動に移して将来の地域社会を担う人材になりたい。そんな気持ちが強くなったのは、東北の現地研修を経験したからだと思います」と、2つのセミナーを結び付けて未来を思い描きます。

さらに、「防災・減災」セミナーの体験は家族にも波及しました。「4歳違いの妹がいます。もちろん東日本大震災の記憶はまったくありません。僕が現地で体験したこと、感じたことを家族に話していたら、「私も行ってみたい」と興味を持ちました。この3月に高校を卒業するので、記念に僕たちが巡ったルートを

た学生たちは、地域の食や風土にも強く惹かれたようです。南三陸町のさんさん商店街で食べた海の幸、日本三景松島の遊覧船、ホテルの温かいお

きば小学校2年生。テレビを見たら大きな津波が町を飲み込む瞬間だったことを覚えています。当時はその映像の重要性がわかりませんでした。次第に防災や災害伝承、地域の復興に興味を持つようになりまし。だから、被災地の実情を見ることが体系的に学びたいと思ってセミナーに申し込みました」と語ります。「研修5日目、南三陸町内で語り部バスに乗ったとき肌で感じた高低差が忘れられませんでした。震災前の低い土地に残った防災庁舎の遺構と、そこから10mもかさ上げされた見渡すかぎり平坦な土地。事前学習で資料を読み、映像も見たはずだけれど、衝撃を受けました。実際にその場に行かないとわからないですね。ここでは地域住民同士のつながりや防災教育の大切さを感じました」。

もちろん現地では事前学習で知り得なかった災害の実情に触れ、想像していたこととのギャップに驚いた例もありました。例えば、避難所では常に住民同士が協力して苦難をうまく乗り越えたと思っていたが、仮設住宅に移る際に妊婦や高齢者が優先されたことに対して不満が出るなどトランプが少なくなかった。支援物資や食料が避難所の人員にマッチせず廃棄された。一人当たりのスペースやパーテーションの設置などの基準が守られなかった。トイレの衛生管理は常に問題があった。など。そういった、実際の災害対応の大きな課題を現地の方のお話から伺えたということは、現地訪問でないと知り得ないことでした。

もてなし。濱田さんは、「訪問先では感情を揺さぶられる場面も多いので、連日過密なスケジュールでは精神的にきつくなります。こうしたセミナーには楽しい記憶も必要です。少し早めに切り上げて地域の方と交流を深めたり、昼食時にフリーの時間を作ったりしました」と補足してくれました。これに対して学生課の手嶋さんも、「講座のテーマ設定や訪問先の選択だけでなく、その周辺のこまごまとした配慮がこのセミナーの価値を高めてくれました」と語ります。

震災を体験していない世代へ、そして東北から離れた地に住む人へ……。福岡大学の夏期セミナーは、被災地の多様な記憶を肌で感じることで、未来の災害の備えとなること信じて、教育機関と旅行会社が

語り部を続ける意味を知り、学生たちも伝承のバトンを受取った。



元気仙沼消防署指揮隊長・佐藤氏による講話。



「観光もできて、南三陸町で食べた海鮮丼の美味しさに感動しました」という加藤さん。



原田さんは、「夏期セミナーを通して防災・減災学習に取り組む多くの仲間ができた」と語る。



高校生語り部によるガイドで館内を見学。



「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」へ。

クル「縁」の代表を務めます。高校卒業後に福岡大学の文系学部に進んだものの、進路変更して看護学科に入学したそうです。

「このセミナーに参加したのは、防災・減災に関心があったというより、新しいことに挑戦して将来につながる選択肢を見つけないかと思ったからです。まだどんな看護師になりたいか、どんな領域で仕事をしたいかは決まっていなかった。現地研修初日に福岡県の『フォレストパークあだたら』の災害対応キャンプで、災害時に想定されるケガの応急処置の講習を受けました。これが後に「縁」を立ち上げようと思ったきっかけといえるかもしれません。看護学科のカリキュラムにも災害医療の授業はありますが、わずかな時間しかなくて、そのほかに関連する内容を学べる機会はないんです。だから、例えば避難所の運営、AEDの使い方などの救急医療、公衆衛生など広く災害対応を学んで、それを発信しています。現在のメンバーは約90人。夏期セミナーに参加した仲間ほぼ全員参加してくれていま

す。1年前は、自分がこんな防災・減災に深く興味を持つとは思ってもみませんでした。

「縁」の始動は学内の「学生チャレンジプロジェクト」に認定されたこと。これは学生が自由な発想から企画した独自のプロジェクトに活動資金等を支援するという制度で、2024年は薬学部が学生による災害時の移动式調剤薬局プログラム「オタスケ薬局car」が認定されており、「縁」はそれとリンクするプロジェクトとして認められました。

原田さんは現地で印象に残ったことを次のように挙げました。

「バスから眺めた景色です。震災から14年経っても、新たに整備された都市部から離れると、まささらな更地があり、さらに撤去されずに廃墟化した建物もたくさんありました。建物を覆うほど雑草が生い茂っていたりする光景が目につきました」。

災害とまちづくりをリンク

法学部3年の加藤颯太さんは、「東日本大震災が起きたと

参考にして家族で東北の被災地を旅行する予定です」。

東北の風土を学ぶ

もてなし。濱田さんは、「訪問先では感情を揺さぶられる場面も多いので、連日過密なスケジュールでは精神的にきつくなります。こうしたセミナーには楽しい記憶も必要です。少し早めに切り上げて地域の方と交流を深めたり、昼食時にフリーの時間を作ったりしました」と補足してくれました。これに対して学生課の手嶋さんも、「講座のテーマ設定や訪問先の選択だけでなく、その周辺のこまごまとした配慮がこのセミナーの価値を高めてくれました」と語ります。

夏期セミナー参加で見つけたテーマに沿ってSNSを発信するなど、一人ひとりの学生たちの「その後」が始まり、そして続いています。

震災を体験していない世代へ、そして東北から離れた地に住む人へ……。福岡大学の夏期セミナーは、被災地の多様な記憶を肌で感じることで、未来の災害の備えとなること信じて、教育機関と旅行会社が

南三陸町内をめぐる「語り部バス」に参加。



津波にのまれた「高野会館」へ。



machico防災部といっしょ

繁野さんが運営委員長を務める仙台市立西多賀中学校の避難所運営訓練に参加しました。西多賀中学校では、「自助」「共助」の精神に基づき、地域コミュニティが主体となって避難所の開設・運営の訓練が行われ、中学生が主体的に関わりながら進行。後半には避難訓練を兼ねた地域住民の参加もあり、地域全体で防災意識と連携を高める時間となりました。

2

地域の方も集まり、避難訓練・見学

避難所が立ち上がり、避難者役の地域住民を受け入れた後は、参加者全員で防災備蓄倉庫や簡易トイレの見学、携帯トイレ作り体験が行われました。また、この日は自衛隊や消防署の協力もあり、自衛隊の災害特殊車両や野外入浴セット、消防車(救助工作車)の見学の機会も設けられました。



machico防災部が

地域の防災訓練に参加してみた!

1

まずは運営訓練がスタート!

さっそく避難所開設のための準備を開始。事前に授業で避難所と運営班の役割を学び、各班に割り当てられた中学生を、各町内会の代表や防災部長、SBL(仙台市地域防災リーダー)などがサポートしました。



各班の役割

- 総務班 ●レイアウトづくり ●発電機や投光器の準備・設営
- 受付名簿班 ●避難者の把握 ●名簿作成
- 情報広報班 ●避難者への情報提供 ●避難所ルールの周知
- 救護班 ●負傷者への応急手当 ●要援護者への対応
- 食料物資班 ●食料・物資の調達・仕分け・配布
- 衛生班 ●簡易トイレや携帯トイレの準備 ●ペット対応

避難所を運営する訓練に参加したのは初めてでした! 避難所は当然前に用意されるものではないのだと実感しました。



今回のテーマ

いざという時、避難するイメージが湧かない...

machico会員 (40代女性)



体験してみた人 / machico防災部員 てる



教えてくれた人 / 防災士 SBL(仙台市地域防災リーダー) 西多賀地区代表 繁野みどりさん

地震、台風、豪雨...もし大きな災害に遭遇した場合、安全に避難できる場所を把握していますか? いざというときに慌てないように、自宅や勤務先周辺で行われている防災活動に日ごろから目を向けておくことが大切です。今回は、仙台で防災士として活躍する繁野みどりさんに、地域で防災活動を行う目的、参加する意義について教わりました。

machico編集部(以下M) : 繁野さんは防災士のほかに防災に関わるさまざまな肩書きをお持ちですよね。どのような経緯で防災活動に携わるようになったのですか?

繁野さん(以下F) : 東日本大震災発生時、沿岸部では多くの民生委員が住民の安否確認に向かう途中で亡くなられたことを知り、心を痛めると同時に、誰かの助けを待つのではなく、まず自ら助かろうとする「自助」の重要性を痛感しました。その具体的な方法を学び、周囲に伝えたいと思ったことがきっかけです。

M : どのような活動をされているのですか?

F : 避難所運営委員長を務める西多賀中学校での年1回の避難所運営訓練の準備・実施をはじめ、地域の防災マップ作成や地域住民向けの防災講座、仙台市内の小中学校における防災授業支援など、幅広い防災活動に取り組んでいます。

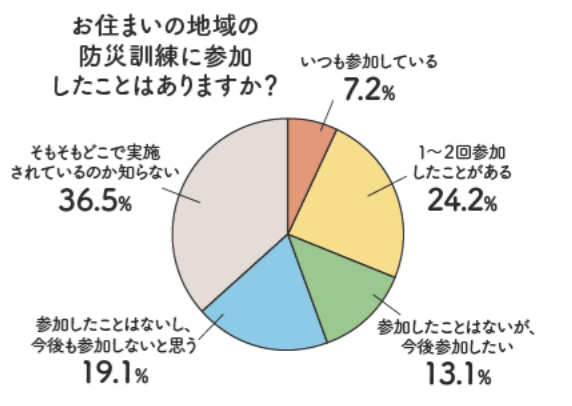
M : 防災授業や防災講座ではどんなことを教えているのですか?

F : 自らを守る「自助」と、

M : 地域で行われる避難訓練などには参加すべきですか?

F : 地域の防災行事に参加することで、実際の災害時に命を守り、助け合い、早期復旧に役立つ知恵を身に付けられます。地域の皆さんとのつながりも深まりますので、ぜひ参加していただきたいですね。

M : なるほど。参加することで「自助力」と「共助力」の双方を養うことができるのですね。これからは私も積極的に参加したいと思います。



WHAT'S machico防災部とは

仙台・宮城の人とまちを元気にする地域コミュニティサイト「せんだいタウン情報machico」の編集部員が、防災・減災に役立つスキルを体験して発信する「部活動」です。

machicoからアーカイブが見られます!



住んでいる地区の避難所・避難場所を

確認しよう



避難所等の
情報を
収集しよう

最寄りの避難所や避難場所、避難経路については、各市町村ホームページ内にある「防災・災害対策」のページや、各市町村が配布するパンフレット、防災マップなどで確認できます。

避難経路を
歩いてみよう



避難経路等が確認できたら、次は実際に避難経路を歩き、危険箇所等チェックしておきましょう。自宅から避難所や避難場所への経路は2~3コース想定しておくことで安心です。

記入してみよう!

自分の住んでいる地区・学区を把握しよう

地区名
(学区名)

自宅の最寄りの避難所や避難場所を調べよう

※指定避難所は「地震のときは使用できるが、大雨のときは使用できない」など、災害に応じて使用できる条件が異なるので、最寄りの避難所はどのような災害時に使用できるのかあらかじめチェックを。

洪水・水災のとき

例)〇〇小学校

地震のとき

津波のとき

土砂災害のとき

自宅から避難所や避難場所まで歩いてみよう

何分かった?

どのルートを通る?

“避難所”にあるものを

知ろう

公立小中高等学校といった各市町村が指定する指定避難所には、どんなものが用意されているのでしょうか。西多賀中学校を例に紹介します。

防災備蓄倉庫

校内の備蓄場所には、各市町村で定められた災害救助用物資が備蓄されています。ただし必要最低限の備えであるため、その量は意外と多くなく、食料や飲料水の備蓄は400人×2日分程度。避難所はあくまで発災直後の急場をしのぐための場所と心得て、必要なものは各自で備える意識が大切です。



災害時に水洗トイレが使えなくなった場合に備え、各指定避難所には「携帯型簡易トイレ」と「簡易組立トイレ」が備蓄されています。



携帯型簡易トイレ
簡易組立トイレが設置されるまでの間に使用することを想定。洋式トイレにセットして使い、使用後はごみとして処分することが可能です。



簡易組立トイレ
組立マニュアルを見れば誰でも組み立てが可能。携帯型簡易トイレともども、凝固剤を使用して排泄物を固めてから捨てるので衛生面でも安心です。

備蓄されているもの

- 食料……クラッカー ● ようかん ● アルファ米 ● アルファ粥 ● 飲料水
- 資機材……カセットガス発電機 ● LED投光器 ● 情報収集用テレビ ● 簡易組立トイレ ● 携帯型簡易トイレ ● テント式プライバシールーム ● ホワイトボード ● 救急セット ● 毛布 ● 大型扇風機 ● 使い捨てカイロ ● 防災行政用無線 ● 災害時特設公衆電話 ● ネックレス型LEDライト
- その他……運営マニュアル ● 腕章 ● 災害時多言語表示シート ● 事前に作成したルール など

避難所によってこんな設備がある場合も

野外入浴セット

被災地で断水が生じている場合などには、被災地自治体の要請に応じて自衛隊による入浴支援が行われることがあります。陸上自衛隊が装備する「野外入浴セット」は1万リットルを蓄えることができる貯水タンクを備えており、1日に1200人の利用が可能です。



ペットスペース

避難所にはペット同行避難者のためのスペースが設けられています。ただし避難所はさまざまな人が共同生活を送る場所。みんなが快適に過ごせるよう、ペットには最低限のしつけや日頃からの健康管理を行い、ペット用防災セットの準備をしておくようにしましょう。



災害が発生した際、自宅が被災するなどして在宅避難が困難な場合には、避難所への避難も選択肢の一つ。「もしも」に備え、避難所がどのような場所なのか、日ごろから理解を深めておきましょう。
監修 SBL(仙台市地域防災リーダー)西多賀地区代表 繁野みどりさん



みて





防災脱出ゲーム。各ミッションをクリアするともらえるひらがなを並べ替え、防災に関する言葉を探し出す。



〈上〉災害時に備蓄倉庫として活用される場所を見学。有事の際の拠点を楽しみながら知ることができるのもイベントの大きな特徴。〈中〉水害時に浸水対策として使われる「土のう」の重さを実際に体感し、積み上げてみるなどの体験も。〈下〉段ボールベッドの組み立てにも挑戦。組み立てにかかる時間や寝心地なども体験しながら避難所設営を学んだ。

公共電話を使ったことがない子どもも多いため、公共電話のデモ機を使い、電話のかけ方と災害用伝言ダイヤルの使い方を実践。中学生が操作をサポート。



取組② キーワード ▶ 防災の担い手育成 □住民同士のつながりを育む □災害時対応を学ぶ

多賀城市 わくわく防災フェスティバル

学びの場から育つ 地域主体の防災力

未来における防災の担い手育成を目的に、2024年から開催されている「わくわく防災フェスティバル」。市内の6つの小学校で行っている放課後子ども教室「わくわく広場」での体験活動が原点となっています。会場は、備蓄倉庫を備えた防災拠点。参加する児童たちは段ボールベッドづくりや公共電話体験などに取り組み、最後に脱出ゲーム形式で学習の成果をアウトプット。楽しみながら防災への意識と知識を身に付けることができます。

また、市内の中央・大代・山王地区では公民館主体で「防災キャンプ」を開催。地区それぞれに異なる災害発生時のリスクを踏まえてカリキュラムを組み、小学4～6年生に向けて防災学習の機会を提供しています。

フェスとキャンプ。形は違えど共通する願いは、大人も子どもも、得た学びをそれぞれの自発的な防災行動につなげる。その連なりが、次世代へと手渡される地域の防災力を形づくっていくはず。

多賀城市：宮城県の中央に位置。奈良～平安時代には律令国家における東北支配の重要拠点であり、市の東部や北部には史跡が数多く点在している。東日本大震災では市の約3割が浸水被害を受けた。



〈上〉大人と子どもが力を合わせたバケツリレー。防災訓練は、地域住民の一体感を築く場に。〈下〉オイルパンの中で上がる炎を毛布で消す初期消火訓練。町内会の婦人部が参加した。



要支援者や重傷者を想定し、中学3年生も参加して行った車椅子の介助訓練。「段差を乗り越えるのが大変だった」との感想も。



福住町町内会の防災訓練には、身近なものを使った応急処置や非アレルギー食の試食など、企業や団体による32のブースが出店した。

取組① キーワード ▶ □災害時対応を学ぶ □防災意識を高める □住民同士のつながりを育む

仙台市宮城野区 福住町町内会防災訓練

小中学生と地域住民が 一緒に共助を学ぶ防災訓練

仙台市宮城野区福住町は、梅田川と七北田川に挟まれた地理的環境から、幾度となく台風や大雨による水害を経験してきました。「自分たちの町は自分たちで守る」を合言葉に、自主防災組織を立ち上げたのは2003年。防災・減災、共助の備えは、「福住町方式」と呼ばれ地域防災のモデルとなつていきます。その象徴的な取り組みが、毎年の防災訓練です。3・11（東日本大震災の発生日）以降は田子小学校、田子中学校、高砂小学校の「防災授業」となり、学区内の14町内会に分かれて一斉に訓練が行われます。「災害時は、消防隊も救急車も行政も同様に緊急事



6人1チームになり、倒壊した建物から人を助け、手作り担架に乗せて実際の救急車に運ぶまで、一連の流れをシミュレーション。消火器の使いかレクチャーも。

態に陥っています。そのため、まずは自分の命を守る自助、そして地域住民の力で乗り切る共助が不可欠です」と語るのは、福住町防災減災部長の大内幸子さん。訓練の内容は町内会ごとにさまざま。福住町では、小学校低学年向けのカラフルランタン作りや、中学生による人命救助シミュレーション、全員参加のバケツリレーなどを実施しました。「子どもたちは9年間防災訓練に参加します。3・11では一緒に訓練をした中学生が避難所運営を手伝ってくれました。共助の意味を直接伝え、体験で学んだことは必ず生きると実感しています」（大内さん）。

福住町町内会：人口約1500人。3.11では、仙台市立高砂小学校に避難所を開設し、帰宅困難者を含む約2000人を受け入れた。福住町独自のハザードマップを作るなど、日頃から防災意識が高い。写真は、福住町町内会副会長・防災減災部長の大内幸子さん。



きてみてマップ

きてみてで紹介した施設のほか、
宮城県内のおすすめ立ち寄りスポットも
掲載しています。

立ち寄りスポット



1 いしのまき元気いちば



2階のフードコート「元気食堂」では新鮮な魚介や野菜、地元グルメなど石巻自慢のメニューが勢ぞろい。

DATA ◎宮城県石巻市中央2丁目11-11 ☎0225-98-5539 🕒11:00~20:00(土曜・祝前日20:30、LO=30分前) ※1階の物販コーナーは9:00~19:00。季節や予約状況などにより変更があるため公式HPなど最新情報を要確認。🌐<https://www.genki-ishinomaki.com/>

2 東北歴史博物館



旧石器時代から近現代まで東北地方の歴史と文化を総合的に紹介する博物館。多賀城跡に隣接し、発掘された貴重な資料や復元模型で、古代から現代へ続く東北の歩みを分かりやすく学ぶことができます。

DATA ◎宮城県多賀城市高崎1-22-1 ☎022-368-0106 🕒9:30~17:00 ※観覧券の発券は16:30まで 📅月曜日(祝日の場合開館)・翌日休館 🌐<https://www.thm.pref.miyagi.jp/>

3 仙台うみの杜水族館



「いのちきらめくうみ」をコンセプトにした三陸の豊かな海を再現した太陽光が降り注ぐ大水槽でマイワシの魚群や、イルカ・アシカ・バードのパフォーマンスを楽しめる東北最大級の水族館です。

DATA ◎宮城県仙台市宮城野区中野4-6 ☎022-355-2222 🕒9:00~17:30(最終入館17:00) ※季節により変動あり 📅なし 🌐<https://www.uminomori.jp/umino/>



宮城の復興の「いま」を
SNSでお伝えしています!
皆さまからの投稿も
お待ちしております!



LINE



Facebook



X (Twitter)



Instagram

Baton

発行元

宮城県震災復興本部(事務局:復興支援・伝承課)
〒980-8570宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号 TEL:022-211-2443

